

# 書評

館 暲 著

## ロボット入門

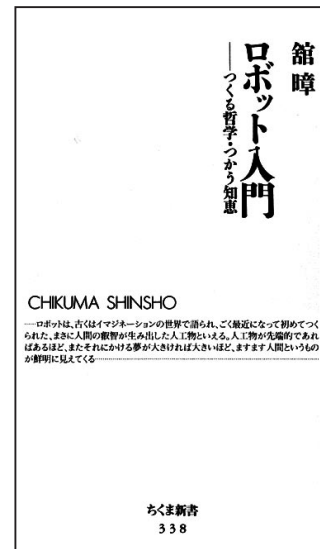
一つくる哲学・つかう知恵

ちくま新書

ISBN4-480-05938-5 C0253

2002年発行

評者：東芝 橋本英昭



昨今のペットロボットやヒューマノイドロボットの話題性に乗じて、新書版の「入門」と称したロボット本がこの1、2年で多く出版されている。評者自身、本書をそれらと同列の読み物感覚で気楽に読もうとしたが、冒頭から筆者のロボットに対する哲学や熱い思いが込められており、気分を引き締めて読み返した。

もちろん「入門書」であり、複雑な数式や制御ブロック図などは殆ど出てこないため、一般的な読者でも十分に読みこなせる内容である。しかし、ここで語られる筆者の思いは、実は、既に何らかの形でロボットの研究開発に携わっている、あるいは志している人たち全てに向けられているのではないかと感じられる。そういう意味では、ロボットに興味のある本学会の会員の方にも一読をお勧めする。

筆者は、あらためて言うまでもないが、本学会初代会長でありトレイグジスタンスを中心としたロボット研究の第一人者である館先生である。

本書は終章を含めて8章からなっており、主に前半部分で神話時代からのロボットの歴史が筆者のロボットに対する哲学を交えて述べられている。その後、ロボットの技術、分類毎の研究発展の歴史が紹介され、後半部分ではトレイグジスタンスを中心としてその究極の姿であるアールキューブ構想とその最新の研究成果であるHRPプロジェクトが紹介されている。

もともとが、NHKの連続講座での講義内容をまとめたものであるため、各章毎にうまく完結しているが、筆者の哲学、思いが各章にちりばめられており、できることなら通読をお勧めしたい。

1、2章では神話時代からの人類とロボットの関わり方と、初期の産業用ロボットから現在までのロボットの発展史が述べられている。ここで紹介されている神話「イリアス」やチャペックの戯曲「R.U.R.」、あるいはアシモフのロボット三原則は、本書の根幹をなす「ロボットをつくる哲学」、「ロボットをつかう知恵」を導くための原則として、以降の章にも引き継がれる。

3、4章では、ロボティクス誕生までの技術的な歴史が述べられている。特に4章は、現在までのロボティクスの基本的な技術の進歩がコンパクトに分かり易くまとめられており、これからロボティクスを勉強しようという方には最適な案内になっている。

5章では、他章とは独立して、人間の失われた機能を補うことを目的としたサイバネティクスの発展とその成果の一つとして盲導犬ロボットが紹介されている。

6、7章では、自律型ロボットと相対である人間能力増幅型ロボットについて、その最も一般的な使われ方である遠隔操作技術、またその発展型であるトレイグジスタンス技術の概要、および自律技術やVR技術などと高度に組み合わせられたアールキューブ構想について紹介されている。

終章においては、今後のロボットが進むべき道は、「分身性」「非匿名性」「安全知能」という3つの技術であるとしている。これらは本書を通読すれば、非常に納得性のある提言と感じられるだろう。